

自然

神戸芸術工科大学 学長
松村 秀一
Shuichi Matsumura

土木のお二方の趣味

もう四半世紀ほど前のことになると思う。当時私がいた東京大学では、入学後二年間は全員が教養学部
に属し、工学部や理学部などの専門
の学科には三年生になってから進学
するルールになっていた。二年の前
半が終わったところで、学生たちは
進学したい学部・学科を決めて大
学に届け出る。定員よりも希
望者が多い学科では、二年の
前半までの成績の上位者から
定員になるまでの学生が進学
を許され、それより成績が下
位の学生は第二希望以降の学
科に回っていくことになる仕
組みだった。

この様子を学部・学科の立場か
ら見てみれば、希望者数が定員を上
回り、その上回りが大きければ大
きいほど「人気学部」、「人気学科」
ということになり、成績の良かった
学生が集まってくる。
工学部の場合、毎年五月頃に、各
学科の担当教員が一年生と二年生
のいる教養学部に出向き、希望者を
増やすべく学科の紹介、有体に言え

ば売り込みを行っていた。一学科二
五分ほどの時間が与えられ、それぞ
れに自由な形式で学科紹介を行う
習わしだった。
私は何年もの間建築学科の売り
込み担当を務め、毎年一人で淡々
と学科紹介をしていた。これに対
して、土木工学科(後の社会基盤学
科)は若手からベテランまで複数の
教員がやってこられて、それぞれに

数分ずつ話す形をとっておられた。
ベテラン教授は、学生が親しみやす
いようにご自身の趣味の話などを
披露するのが常だった。何名ものベ
テラン教授の話をお聞きしたが、今
でも記憶に残っているのは、比較的
私に年齢の近かった磯部雅彦先生
(海岸工学)と家田仁先生(交通工
学)のお二人の、特に趣味のお話。

私の記憶が正しければ、磯部さん
は日本中の海岸線を泳ぐという、伊
能忠敬の水泳版のような、誠に海岸
工学者かくあるべしというべき趣味
を披露された。一方の家田さんの趣
味はカメラで、四万十川でカメラを
漕ぐご自身の姿を上空から撮った
写真を見せながら、「さあ、この川
はどこだと思う？」と学生に声をか

けておられた。

「『自然』なんだ」と思っ
た。たった二人の先生の趣味
で結論付けるのは無理なのだ
が、その時私は「土木の先生は
自然と交わろうとするのだ」
と思い込んでしまった。それ
に対して、私のまわりの建築
学専攻の同僚たちは都市の中
で楽しめることを趣味にして
いるという印象が強かった。
これも思い込みかもしれない
が、この時、トンネルにせよ、
道路にせよ、橋にせよ、ダムに
せよ、土木技術者が相手にし



自然が建築を呑み込む風景(「安平樹屋」:台南市のイギリス商社の元倉庫の建物とガジュマルの木)

いう感覚があるように思う。

自然を何だと 思っているの？

そういう他人感の反映だろう
か、最近の建築界では、「自然」を、
都合よく選び取り、好きなように制
御できる対象であるかのように語
る人が少なくない。

学生対象のある設計賞の公開審
査をしていた時のことである。建物

のところどころに用意されたバルコ
ニーのような場所に植物をはやし、
外部に鳥が遊びに来るというちょっ
とした池を設けたことを「自然を
取り込む」とか「自然を取り戻す」
とか「自然と共に暮らす」とか説明
した学生グループがいた。審査委員
の一人が「自然を何だと思っている
の？自然には熊も鹿もいるし、私た
ち人間も含まれるのに、ちよこつと
緑を植えたくらいで『自然がどうこ
う』とは言えないと思うんだけど。

「『自然』という言葉がそう簡単に使
わない方が良くと思うよ」とたしな
めた。
この学生たちだけがそうなので
はない。プロの世界でも「自然」とい
う言葉を間違っって使っているのをよ
く見かける。
「オフィスに自然を取り込むこと
によって生産性が上がるというデー
タがあります」
などという発言を聞くと、頭がクラ
クラする。自然を空調や照明のシス
テムか何かと勘違いしているのだ。
SDGsへの取り組みによって、
人間の快適性や生産性が自然と矛
盾なく両立する、そんな未来が待っ
ているのだなどと、根拠も正当性も
ないイメージを植え付けられてし
まった人がいるのではないかと疑り
たくもなる。
人間が企みを持たず、一切の作為
から離れる時、人はその状態を「自
然」と呼んできた。自ずから然り。
建築に自然を取り込むなどと
言っている方々は、一度土木の先生
に趣味の手ほどきを受けた方が良
いと思います。

ているのは、自然そのものだと気付
かされた。自然と戦いながら人工物
を構築しているのだと。だから、趣
味においては、その戦う相手としば
し休戦して親しみに行くのだと勝
手に思い込んでしまった。

多くの場合建築は、土木が相手
にしているような敵しい自然と相対
することなく実現できる。自然に対
する畏怖の念も、土木の人々程には
持っていないと思う。建築の人々に
は、災害を除けば、自然は他人事と